# 世襲を選ぶとは「断絶を覚悟すること」　天皇制議論に欠けてきた視点

有料記事　　聞き手 編集委員・塩倉裕 2024年10月2日 17時00分

皇室メンバーを**このまま人権のない状況に縛りつけ続けてよいのか**――。今から約20年前、そう訴えて大胆な改革を提言した社会学者がいた。**東京工業大学名誉教授の橋爪大三郎さん**だ。**日本国民が象徴天皇制に幕を引き、共和制に移行するとの構想**だった。皇位継承のあり方をめぐる議論が停滞する中で、目を背けられている問題とは何か。**「世襲制を採用するということは、そもそも断絶を覚悟することなのだ」**と説く橋爪さんに聞いた。

## 「議論の骨格が外れてないか」

――皇室や皇位継承のあり方をめぐる今の議論状況をどう見ていますか。

「いろいろな考えが語られていますが、ピンと来るものが一つもありません。**議論の骨格が外れている**のではないでしょうか」

――**女性皇族が結婚後も皇族の身分を保つ**よう変えたらどうかとか、議論はいくつか進んでいます。骨格が外れているとはどういうことでしょう。

「まず、**皇位継承や皇室のあり方に関する判断は、そもそも誰がすべきものなのか**、です。『政府の取り組みが遅い』との批判が当たり前のように語られていますが、妥当でしょうか」

「日本国憲法は、皇位は世襲だと定める一方、それ以外の具体的な皇室のあり方は**皇室典範という法律で決めると規定**しています。法律を改廃するのは国会ですから、建て付け上、**この問題の最終判断をするのは国会であり、国会に代表を送っている国民**なのです」

――**政府ではない**、ということですか。

## 「政府は何を」が映す当事者意識の欠如

「行政府が意見を持つことはありえますが、それは最終判断にはならないということです。つまり、**国民が判断しなければ、この問題は解決できない**。『政府は何をしているのだ』と考える人もいるでしょうが、当事者意識の欠如であり、主権者にふさわしくない姿勢です」

――骨格が外れていると感じさせられる、それ以外の点とは？

「世襲という問題が直視されていないことです。そもそも**世襲という仕組みを採用するということは、断絶する可能性を引き受けるということ**です。断絶を覚悟し、もし断絶した場合どうするかも考えておかねばならない。世界史を見ても、**王朝は断絶を迎える方が普通**です。実際、日本は今その危機に直面していて、次世代の皇位継承資格者は悠仁（ひさひと）さましかいません。**もし結婚しなかったり男のお子さまが生まれなかったりすれば、そこで終わり**です」

## 万一の場合どうする？　三つの選択肢

「日本の場合は、皇位が非常に柔軟な形で継承されてきたため、『大昔からずっと男系が続いてきた』との外見を何とか取り繕えてきました。しかし、**明治期に欧州の伝統を採り入れ、世襲を厳密に明文規定化してしまったことで、危機が深まり**ました。日本主義者の右翼であれば、このときの『文明開化』をこそ批判し、日本の伝統を取り戻せと主張するべきです」

――万一後継者がいなくなったらどうするかという議論は、確かにほとんど聞いたことがありません。

「世界史を参考にすると選択肢は二つ、ないし三つ考えられます。**一つ目は、よその国の王室から後継者を連れて来る方法**です」

「英国は 18 世紀に王室の後継者がいなくなってしまった際、英語をよく話せない人物をドイツから国王に迎えました（ジョージ 1 世）。日本で同様の手段を採れるようにするには多くの検討が必要ですが、時間をかけて考えればいい。世襲ではなくなるので、憲法改正は必要になります」

## 「外国人の王」で、英国らしさは失われたか

――考えたこともない未来像でした。現状では世論が受け入れるとは思えないものですよね。仮に実現できるとしても、**日本らしさが失われてしまうとの反対意見が強く出そう**です。

「日本国民がそこまでして『天皇という存在を残したい』と思うのかどうかが問われることになります」

「ジョージ 1 世は、英語がよく話せないこともあって、政治をひと任せにしていました。代わりに指導する政治家たちの集まっていた部屋が『キャビネット』。つまり、内閣の語源です。いま世界から英国の国柄の一つとみなされている議院内閣制は、外国人の王を連れてきたことをきっかけに生まれたものなのです。どうでしょう、英国らしさが失われていますか？」

――二つ目の選択肢は？

「二つ目は、**いないものは仕方ないとあきらめる道**です。**天皇がいなくなってしまう**ので憲法改正をする必要が生じます。また君主がいなくなるので、日本は共和制の国になります」

「国事行為をする人がいなくなるけれど、民主主義が回らなくなるわけではない。もし儀礼的行為をする人が必要なら、権限を持たない大統領を置く手もあるでしょう。『万一天皇という存在がなくなったら？』を考えておくことも、主権者たる国民の仕事です」

――三つ目は？

「国民が**どうしても日本の誰かを天皇にしたいという場合の、とっぴな選択肢**です。皇族という概念の範囲をめちゃくちゃに広げ、たくさんの普通の人々を手当も特権もない皇族とみなし、その中から**天皇を選考**していくイメージです」

「『天皇家』としての皇族ではなくなりますが、皇族に人権がない問題も軽減されるので、すべての国民が平等に権利を持つ国に近づく機会にはなります」

## 天皇・皇族の人権は？　「尊皇共和制」という提言

――橋爪さんは今から約 20 年前に**「尊皇共和制」という構想を提言**しましたね。本当に皇室を敬う思いがあるならば、象徴天皇制に幕を引いて共和制に移行すべきだとの内容でした。

「世襲制は**本人の自由意思を認めない制度**であり、職業選択でも婚姻でも天皇や皇族は不自由を強いられている。当事者の苦しみは受忍限度を超えていて憲法の精神に合わない、という問題意識からの提言でした。その我慢と犠牲に無関心な国民に、皇室への敬意があるとは思えません」

――皇室は国家機関であることをやめて**無形文化財**になり、国民の拠出する寄付金を経済的基盤にして自由にお過ごしいただけばいい、との構想でしたね。

「世襲の断絶に関する今日の議論に結びつけて言えば、**尊皇共和制への移行は、断絶という事態を迎えてしまう前に国民が選べる選択肢の一つ**となります」

――天皇や皇室の存在が万一なくなったら日本の伝統はどうなるのかとの心配も出そうです。

「天皇という存在がなぜ大事なのかを考える機会にしてはどうでしょう。『日本人とは何者か』という難題に、皇室の長い歴史と伝統が何となく一つの答えをくれる気がする。それが大事な点だと私は考えます」

「だとすれば、仮にいつかその存在が過去のものになったとしても、国民の中にその歴史と伝統の記憶が生き続けてさえいれば十分なのではないでしょうか」（聞き手　編集委員・塩倉裕）

## ■ 橋爪大三郎さん

　はしづめ・だいさぶろう　1948 年生まれ。東京工業大学名誉教授（理論社会学、現代社会論）。天皇制への踏み込んだ論考で知られる。著書に「皇国日本とアメリカ大権」、共著に「天皇の戦争責任」など。